The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「クオリア」について ： コミュニケーション分析に援用するための理論的基礎考察 II
Author(s)	榎本, 剛士
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91574
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「クオリア」について
―コミュニケーション分析に援用するための理論的基礎考察 II―

榎本　剛士

１．はじめに

本稿は、「『クロノトポス』について―コミュニケーション分析に援用するための理論的基礎考察―」（榎本 2022）の続編として位置づけられる、「コミュニケーション」のより包括的な分析に向けた、さらなる理論的基礎（予備）考察である。

近年、言語人類学においては、「クオリア」（後述）が注目されつつある[1]。「質感」や「感じ」として理解されるクオリアが、なぜ言語人類学の研究対象となるのか、疑問に思われるかもしれないが、それは決して不自然なことではない。

1970 年代中盤以降、ロマーン・ヤコブソン (Jakobson 1960, 1971 [1957]) を経由してパース記号論を取り入れた言語人類学は、「言語」を抽象的な体系として（のみ）措定するのではなく、そもそも社会・文化から切り離すことのできない、コンテクストにおける使用に投錨されたものとして捉え、研究してきた。パース記号論に基づいて、言語の（「象徴記号 (symbol)」としてのみならず）「指標記号 (index)」、および、「類像記号 (icon)」としての側面に光を当て、そこにこそ、言語と社会・文化（コンテクスト）との実質的な接点が在る、とする基本テーゼが、1970 年代後半から今日に至るまでの言語人類学における理論化を大きく特徴づけている、と言っても過言ではないだろう (小山 2008; Silverstein 1976, 1985, 1993, 2004)。

上記のような記号の三分類は、それぞれ、（社会的）慣習、隣接性（存在論的因果性）、類似性という「記号が対象を指す際に依拠する原理」に基づいているのだが、言語人類学においてクオリアが明示的に研究の対象となったことは、記号の三分類とも密接に関連している、パース記号論における「カテゴリー」がより十全に認識され（始め）たことの証である。

すなわち、偶然、（混沌とした）感情、気紛れなど、無秩序の存在であるところの「第一のもの (the First)」、法則によって生じる出来事の継起、また、原因となる出来事と結果となる出来事の連鎖であるところの「第二のもの (the Second)」、そして、これらを「媒介する」、習慣化の「傾向」であるところの「第三のもの (the Third)」（伊藤 1985, 2006）、このようなカテゴリーに即し、かつ、記号の三分類との整合性も併せ持った形での探究が、今後の言語人類学の中で一つの潮流となっていくことが予期される。そして、このことは、言語人類学がパース記号論を取り入れようとするならば、当然とるべき道であると思われる。

もちろん、そのような「道」は、難解を極めるパースのテクストの丹念で精緻な読みに基づいてのみ、進むことができる。しかし、残念ながら、現在の筆者には、そのための力量が十分に備わっていない[2]。したがって、本稿は、「コミュニケーション」のより包括的な分析に向けたさらなる理論的基礎（予備）考察、という形をとらざるを得ないのだが、それでも、上記の「道」を行くための出発点として、本稿をしたためる。

---

[1] 言語人類学におけるクオリアの扱いは、脳科学や哲学の分野におけるそれ（cf. 茂木 1997）とは異なるが、最終的に、何らかの形でつながっていく（つながっていかなければならない、つながっていかなければおかしい）、と（筆者には）思われる。

[2] よって、パースを直接引用しながらの議論は本稿では留保し、稿を改めて行うこととする。

２.「クオリア」とは何か

では、そもそも言語人類学で概念化されるところの「クオリア」とは何か。いくつかの定義を以下に示す。

Harkness (2014):
“the actual instantiations of culturally conceptualized sensuous qualities that people orient to, interact in terms of, and form groups around”

Harkness (2015):
“indexes that materialize phenomenally in human activity as sign vehicles reflexively taken to be sensuous instances of abstract qualities (stink, warmth, hardness, straightness, etc.)”

Chumley (2017):
“sensorial and somatic experiences mediated by cultural qualisigns of value”

Harkness (2021):
“cultural emergent that manifest phenomenally as sensuous features or qualities”

これらの定義を参照しながら、言語人類学が捉えようとしている「クオリア」について、いくばくかの明確化を試みる。

まず、言語人類学で言われるところのクオリアは、「感覚に直接与えられているもの」とはかなり異なる。もちろん、それは感覚を含むものではあるが、“cultural(ly)” という言葉が示す通り、そこには同時に、社会・文化的な価値づけ、社会・文化的な認識可能性が含まれている。すなわち、言語人類学で言う「質の経験 (the experience of qualities)」としての「クオリア」は、単に「世界にあるモノの属性としての質 (qualities as purported properties of things in the world)」というよりもむしろ、「社会・文化的生活の事実 (a fact of sociocultural life)」としてある (Chumley & Harkness 2013)。

このことに関連して、次に挙げられる重要な点が、クオリアはコミュニケーション・行為の中で、コミュニケーション・行為を通じて、再帰的に現れる、ということである。早くは Munn (1986) が、直近では Gal (2017) や Asai (2023) が指摘する通り、クオリアが「社会・文化的生活の事実 (a fact of sociocultural life)」としてあるならば、我々にとってそれは、（カヌーの制作、森林セラピーなどといった）社会・文化的にジャンル化された出来事に参加することを通じてのみ、経験可能である。つまり、言語人類学において、クオリアは、対象との「直接の接触」の結果として生じるのではなく、特定のコンテクストにおいて、「何か」がコミュニケーションに社会・文化的に関連があるものとして指し示され、対象化されるプロセスに、コミュニケーション参加者自身が身を投じることではじめて、「そのようなもの（の質）」として、（再帰的に (reflexively)）経験される（アクセス可能となる）ものである (Harkness 2017)。したがって、クオリアは、個人に完全に閉じ込められるようなものではなく、人々がそれを志向したり、それに関して／基づいてコミュニケーションしたり、その周りで集団を形成したりすることができるような、「間主観的 (intersubjective)」なものである (Harkness 2021)。

ここで、Harkness (2021) がパースのカテゴリーに基づいて導入している tone、token、type という記号論的分類が助けとなるだろう。従来、言語人類学では、抽象的な「型」としての「タイプ」と、その現実態・現れとしての「トークン」との間の記号論的関係に焦点が当てられてきたが、Harkness (2021) が再確認するこのような分類は、クオリアについて "*the typification of tone entokened*" という視座を可能にする[3]。例えば、「うるさい」声を想像してみよう。なぜ、いかにして、特定の音量を帯びた声が「うるさい」のだろうか。もう少し精緻に言い換えるならば、いかにして、私たちは特定の声を（注意したり、自らその場を立ち去って回避したりすべき）「うるささ」の現れとして経験するのだろうか。

そもそも、特定の音量を持つ声は、偶然発せられたものであり、それ自体に「うるささ」が本質的に備わっているようなものではない。しかし、実際の社会生活の中で、我々は、その声を（電車の中、待合室、図書館、飲食店などの）特定の時と場所で、（学生、子ども、（どこかの見知らぬ）家族、酔っ払い、イヤホンをつけずにスマホで動画を視聴している人などの）誰かに帰属させることができるものとして、また、しばしば（「図書館では静かにすべき」などの）道徳的価値判断を伴いながら経験しているだろう。このような、社会・文化的カテゴリーや価値観に媒介されることで、特定の音量や声色を帯びた声 (tone) が範疇化可能となり（typification を被り）、このようなプロセスを通じて、我々はそれを「うるささ」が現実態となったもの (token) として経験する、と理解できるだろう。

我々は日々、感覚を働かせながら生活しているが、感覚器官を通じて入ってきた刺激に対し、「そのまま」「まるごと」反応しているわけではないだろう。このことに鑑みれば、言語人類学においてクオリアが研究の対象となったことは、特定の音声が「ことば」の音[4]として経験されるプロセスそのものが、その他のクオリアの生起・経験と並置され、同一の原理で研究され得る、ということを含意するのではなかろうか。

３．いくつかの事例：日本の中学校から

ここまで、言語人類学における「クオリア」の理解を概観し、それを特徴づけている "*the typification of tone entokened*" という原理的視座について、簡単な想像上の事例をもとに理解を深めることを試みた。本節では、筆者のフィールドワーク[5]からの実際の事例を取り上げ、クオリアの問題が極めて身近であること、また、我々自身の社会化のプロセスにおいてクオリアが極めて重要な位置を占めていることを論じる。

3.1 英語の授業での「リピート・アフター・ミー」

日本の小学校や中学校、高等学校で英語の授業を経験したことがあれば、教師が発する「リピート・アフター・ミー」という言葉に聞き覚えがあるだろう。文字通り、このアクティビティは、生徒たちが教師のあとについて英語の単語・フレーズ・文を言う活動であり、生徒たちが声を合わせ、一斉に英語を発することが、その大きな特徴である。また、極めて興味深いことに、「リピート・アフター・ミー」の枠組みの中で、生徒たちが教師のあとについて特定の英語を口にする

[3] このことを記号論的に言えば、クオリアは、「第一性の事実 (facts of firstness)」、あるいは、「第二性の形のもとでの第一性 (firstness under its form of secondness)」である (Asai 2023; Harkness 2021; Parmentier 1994)。
[4] もちろん、ここで「音（声）」に限る必要はない。
[5] 筆者は 2017 年度、石川県金沢市の某中学校において、1 年生の英語授業のフィールドワークを行った。

時、生徒たちの「声の質」は、通常の会話の時のそれとは大きく異なる。

ある日の授業で、“These are some pictures of dolphins.” という文が、「リピート・アフター・ミー」の対象となったことがあった。当該の授業では、M という男子生徒の机上に IC レコーダーを置いていたのだが、「リピート・アフター・ミー」時の M の声の録音を聞いた時、なんとも興味深い現象に遭遇した。

生徒たち全員が声を合わせて、教師のあとについて “These are some pictures of dolphins.” を言った時にかかった時間は、約 3 秒であった。ところが、M は、他の生徒たちと声を合わせ、一緒にこの文を言った直後、明確に声のボリュームを小さくして、同じ文を一人でもう一度、繰り返した。しかも、小声で、一人で発した “These are some pictures of dolphins.” の方が、他の生徒たちと一緒に発したそれよりも明らかにスムーズに言われていた（一人で発した際にかかった時間は約 2 秒である）。さらに、M が一人での繰り返しを終えて、他の生徒たちと声を合わせ、一緒に英語を発するアクティビティに戻る際には、再び声のボリュームを上げ、スピードも、他の生徒たちと同じスピードに戻したのである！

ここには、 “qualic tuning” と呼ばれる事象を認めることができる。“Qualic tuning” とは、「音響的に経験される価値の枠組みに同調するために、個人の声のクオリアが調整され、操作される」ことを指す (Harkness 2014)。では、ここでの「音響的に経験される価値の枠組み」は何か。少なくとも、「リピート・アフター・ミー」という「授業」内のアクティビティに、生徒としてしっかり（元気よく）参加すること、教師のあとについて他の生徒たちと「一斉に」英語を発する際のリズム（和）を乱さないこと、以上の二つを挙げることができるだろう。M には確かに、当該の英語の文を流暢に、スムーズに発する能力があり、「英語の授業」においてその能力を発揮することに大きな問題はないように思われる。にもかかわらず、なぜ、「リピート・アフター・ミー」の時に、M はそれを行わなかったのだろうか。換言すれば、なぜ M は、「リピート・アフター・ミー」の枠組みから少し離れたところで、声を小さくして、その能力を発揮したのだろうか。

これらの問いに対し、前節で示した Harkness (2014) をはじめとする定義に即して、回答することができるのではないか。すなわち、「リピート・アフター・ミー」の際に実際に発せられる声の質は、生徒たちによって、「社会・文化的に概念化された感覚的な質（この場合は、声にまつわる質）の実際の現れ」として経験されており、生徒たちはそのような質を志向し、そのような質に即して行動し、また、そのような質の周りで（教師のあとについて英語を繰り返す）集団を形成している。また、ここには明らかに、アクティビティにとって「好ましい／好ましくない」という価値判断も織り込まれている。したがって、M の “qualic tuning” は、M 自身が学校や教室で英語の授業に参加する際の規範を内面化していることを指し示していると同時に、特定のクオリアがそのような社会化のプロセスの経験的な窓口となっていることを示唆している。

3.2 激励会での「エール」

次に提示したい事例が、大会に参加する部活動を応援するために開催された「激励会」での「エール」である。

この激励会には、大会に参加する生徒たちは所属する部のユニフォームを着て、参加しない生徒たちは制服で参加する。各部が大会に向けた抱負を言い終わると、応援団（生徒会執行部）のメンバーの音頭で、大会に参加する部に向けて「エール」が送られる。下記は、それを簡易的に文字・記号化したものである。

応：応援団員（一人）　生：（大会に出場しない）生徒たち
［●／★］：太鼓（●）と手拍子（★）が同時に一回鳴ることを表す

応：　東にー　名峰白山のー　朝日をー　仰ぎ
　西にー　日本海のー　夕日をー　望まん
　ここに集いしー　○中ー　健児
　戦いに向けてー　いざー　いざ
生：　（一斉に）いざー　いざ
応：　○中のー　健闘を祈ってー　一拍ー子（いちびょーし）
生：　（一斉に）一拍ー子（いちびょーし）
応：　そーれ［●／★］そーれ［●／★］そーれ［●／★］　［●／★］　［●／★］（太鼓と手拍子が早くなっていく）［●／★］　［●／★］［●／★］［●／★］　そーれ［●／★］　●
応：　○中のー　勝利を祈ってー　二拍ー子（にびょーし）
生：　（一斉に）二拍ー子（にびょーし）
応：　そーれ［●／★］［●／★］そーれ［●／★］［●／★］そーれ［●／★］［●／★］　［●／★］　［●／★］（太鼓と手拍子が早くなっていく）［●／★］　［●／★］［●／★］［●／★］　そーれ［●／★］［●／★］　●　●
応：　○中のー　栄光を祈ってー　そーれ一つの拍手［●／★］　二つの拍手［●／★］［●／★］　三つの拍手［●／★］［●／★］［●／★］　［●／★］［●／★］［●／★］　［●／★］［●／★］［●／★］［●／★］［●／★］［●／★］［●／★］　［●／★］［●／★］［●／★］　［●／★］［●／★］［●／★］　［●／★］［●／★］［●／★］［●／★］［●／★］［●／★］［●／★］＊（太鼓と手拍子が早くなっていく）［●／★］　そーれ［●／★］［●／★］［●／★］
　＊ここまで、所謂「三三七拍子」が二回

真っ先に注意を惹くのが、明らかに現代の日常会話では使用しない「文語調」で喚起される、この中学校を取り巻く自然環境、および、「戦い」に向かって「いざ」出ていく「健児」たちの姿である。さらに、この部分は、音頭をとる一人の応援団員によって、声を張り上げて、「ー」で示した部分が引き延ばされて、声高らかに言われる。他方、生徒たちの「いざー、いざ」と「○拍ー子」は、(「リピート・アフター・ミー」と同様)、声を合わせて、一斉に言われる。そして、太鼓の音は体育館に大きく響き渡るほどの音量で鳴り、それに合わせて生徒たちは力強く手拍子する。

前節で示した定義に照らせば、ここでの声の音量や、(母）音の引き延ばし、また、それに付随する太鼓や手拍子の音は、「クオリア」を成していると言える。大会に参加する生徒たちが入場する前、応援団と生徒たちは、上記の「エール」の「練習」を行っていた。このことは、「エール」を送る際の声や音にまつわる質が「社会・文化的に概念化」され、共有されていることの何よりの証左である。

また、前項で取り上げた M と同様、生徒たちが “qualic tuning” を行っていることも容易に観察できる。ここでも、「リピート・アフター・ミー」と同じく、「激励会」にしっかり参加し、他の生徒たちと「一斉に」、リズムや和を乱さずに「エール」を送る、という「価値の枠組み」が「音響的に経験」されている、と見ることができるだろう。しかし、「授業」とは異なる「激励会」においては、郷土の自然を仰ぎ見る、自校の健闘・勝利・栄光を願う、自校を代表して「戦う」生徒たちを応援する、といった「価値の枠組み」も、音響的に、また、しばしばこのような応援を特徴づける言葉遣い（レジスター）を通じて、経験されている。そして、そのことが、特定の地域にある学校という場所における「連帯感」の経験的な基盤・投錨点の一つとなっているのではなかろうか。

４．クオリアの現れとクロノトポス

前節では、英語の授業における「リピート・アフター・ミー」のアクティビティ、および、「激励会」での「エール」を事例として、「クオリア」概念を援用することが、生徒たちが実際に経験している「社会・文化的生活の事実」（の一端）を照らし出すうえで有効であることを示した。

さて、冒頭に記した通り、本稿は、「『クロノトポス』について―コミュニケーション分析に援用するための理論的基礎考察―」（榎本 2022）の続編として位置づけられる、「コミュニケーション」のより包括的な分析に向けた、（多少の事例分析を含む）理論的基礎（予備）考察である。ここで筆者が考察を加えたい問題が、「クロノトポス」と「クオリア」との関連である。

4.1 クロノトポス再訪

繰り返しを恐れずに言えば、「クロノトポス」は、（文学において芸術的に表される）時間的・空間的関係の本質的な繋がりの謂いであるが (Bakhtin 1981)、「クロノトポス」を単に「時間的・空間的コンテクスト」として理解したのでは、その本質を見誤ってしまう可能性が高い[6]。榎本（2022）において、Clark & Holquist (1984) や Morson & Emerson (1990) も引きながら論じた通り、「クロノトポス」は（ジャンルやジャンル間の区別を定義する）形式的に構成的なカテゴリーであり、そこには、意識の歴史 (history of consciousness)、精神 (mind) による経験の組織化といった、哲学的な問題が横たわっている。

つまり、「クロノトポス」は紛れもなく、基本的に秩序立てられていない出来事に対して我々が投げかけることのできる（少なくとも一つの）「解釈枠組み」であり、したがってそれは、すぐれて「メタ語用」的な概念である (Silverstein 1993)。言語人類学者たちは、「クロノトポス」をそのようなものとして理解し、コミュニケーションの分析に援用することで、(1)「クロノトポス」的な構築・定式化は、社会的生活の時間的・空間的な展開を解釈し形作るメタ記号的な枠組みである、(2) 時間、空間、社会性、人格の経験を可能にする「クロノトポス」は、時間・空間・人格の形態をメタ記号論的に投影することで、今・ここで展開する記号作用を媒介する、といった「クロノトポス」に関する再解釈を紡いできた (Nakassis 2016; Silverstein 2016)。

このことを踏まえ、また、「時間的・空間的関係の本質的な繋がり」というバフチンの言葉にも留意して、榎本 (2022) では、「クロノトポス」を「少なくとも一つの『相互行為のテクスト』の軌跡 (trajectory) が（イデオロギー的に）ビルト・インされたコミュニケーションの場」と暫定的

[6] 時間的・空間的コンテクストを論じたいのであれば、わざわざ「クロノトポス」という用語を使わずに、「時間的・空間的コンテクスト」として記述した方が良い、というのが筆者の見解である。

に定義した。

4.2 クオリア、あるいは、クロノトポスと感覚の相互嵌入

では、クロノトポスを上記のように（暫定的に）定義したうえで、「クオリア」と「クロノトポス」について、どのような考察を加えることができるだろうか。まず、作業用に、重要なポイントを並置する。

クロノトポス：
少なくとも一つの「相互行為のテクスト」の軌跡 (trajectory) が（イデオロギー的に）ビルト・インされたコミュニケーションの場

クオリア：
"*the typification of tone entokened*"

コミュニケーションは、生起する様々な記号を媒介として、コミュニケーション参加者同士、および、参加者とコンテクストとを関係づけ（結びつけ）ながら、進展する。「相互行為のテクスト」とは、その際に刻まれる、コミュニケーション参加者たちの間に現れる関係づけ（結びつき）の含意や帰結、相互行為の構造に関する解釈（モデル）である (Silverstein 2007)。社会・文化的コミュニケーションは「ジャンル化」されている、という言語人類学の知見を受け入れるならば、我々のコミュニケーションは、本質的に未完結ではあるものの、少なくとも一つのクロノトポスをいわば「舞台」として、特定の「相互行為のテクスト」のモデルに一部「乗っかり」ながら、そして、一定の収束に向かうダイナミズムを孕みながら、展開するものと考えられる。

ここで、Asai (2023) が「森林セラピー」における「オノマトペ」の使用について論じている点を拡張的に理解しても良いのではないか。Asai (2023) は、森林セラピーにおいて、オノマトペが「生起している出来事を自然化し、そのことを通じて、それが進行するコミュニケーションにおける有契の（恣意的でない）性質として理解される、という意味において、『最も記号論的でない』経験を記号論的に生み出している」と述べている。この「最も記号論的でない」出来事は、記号論的に生み出されているのだから、そもそも記号論的なのだが、それは「記号論的 (semiotic)」に理解されるのではなく、「感覚的な真実 (sensuous truth)」として「感じ」られる。

本稿で指摘したいことは、「英語の授業」における「リピート・アフター・ミー」も、「激励会」における「エール」も、生徒たちにとっては、「感覚的な真実 (sensuous truth)」として「感じ」られているのではないか、ということである。否、少なくとも「感覚」から完全に離れて存在することのできない我々は、記号論的に生起している「社会・文化的生活の事実」を、「クオリア」を通じて経験するがゆえに、あたかもそれが「感覚的な真実 (sensuous truth)」であるかのように解釈（誤認 (misrecognize)）しながら生きている、と言えないだろうか。

このような、記号論的に生み出される、最も記号論的でない経験としての「感覚的な真実」は、後続する出来事に、また、そこに投錨されながら刻印され（続け）る「相互行為のテクスト」に対して、どのように「メタ語用」的に作用するのだろうか[7]。そして、そのようなプロセスに、「ク

[7] 換言すれば、Silverstein (1993) で展開された三つのカリブレーションの多層的な動態の中に「クオリア」をどのように位置づけることができるのだろうか。

ロノトポス」はどのように関与する（ことができる）のだろうか。

紙幅の関係もあり、本稿では、問題意識の萌芽としてしか、議論を提示することができない。しかしながら、少なくとも、このような視座は、コミュニケーションのプロセスを、身体（感覚）も含めた形で、社会・文化の中で分析する際に不可欠となっていくと思われる。

５．おわりに

本稿では、「コミュニケーション」のより包括的な分析に向けたさらなる理論的基礎（予備）考察として、「クロノトポス」に続き、「クオリア」を取り上げた。そして、いくつかの事例に基づきながら、両者の間に重要な接点が（きっと）あることを、萌芽的にではあるが、論じた。

そもそも我々は、身体を通じた「感覚」を伴いながら生きている。しかし同時に、我々は、「社会・文化的生活」を営んでもいる。言語人類学における「クオリア」の研究は、これらの否定しがたい事実を真摯に受け止めながら、また、1970 年代中盤から積み上げられてきた記号論的な「コミュニケーション論」に則しながら展開しており、これからもそのように展開していくのだろう。

「はじめに」で示した通り、言語人類学においてクオリアを研究の対象とすることは、まずもって、記号の三分類をその一部とするパースの哲学体系をより十全に取り入れることを意味する。加えて、これまでの言語人類学において蓄積されてきた知見に基づくならば、「感じ」や「感覚」を、コミュニケーションから切り離された「身体（性）」や「脳」に還元することなく、相互行為のプロセスの中で捉えることである。さらに言えば、それらを「行為」や「動き」に投錨することでもあるだろう。本稿で「クオリア」と「クロノトポス」の接点を模索しようとした理由はそこにあり、今後も、そのような方向で探究を続けていきたいと考えている。

このことに加え、最後に書き残しておきたい。確かにこれまで、言語人類学はパース記号論を道標とし、言語・社会・文化を統合的に扱う理論・枠組みの構築を行ってきたが、その分、認知科学との接点がやや後景化してしまったことは否めないのではなかろうか。言語人類学が、記号の三分類に加えて、パースの「カテゴリー」をより十全に取り入れることに成功した時、それは、これまでに行われてきた「言及指示」の脱中心化と、記号の地平を「言語」を超えて押し広げることとを通じて、「コミュニケーションの記号論」に変貌し (cf. Harkness 2022)、社会科学と認知科学の両者がともに居場所を見つけることができるものになるのではないか。このような希望とともに、本稿を閉じる。

参考文献

Asai, Yuichi (2023) “How forests of qualia emerge,” Signs and Society 11(2), 115-145.

Bakhtin, Mikhail M. (1981) “Forms of time and of the chronotope in the novel: Notes toward a historical poetics,” The dialogic imagination, ed. by Michael Holquist, 84-258, University of Texas Press, Austin.

Chumley, Lily H. (2017) “Qualia and ontology: Language, semiotics, and materiality; an Introduction,” Signs and Society 5(S1), S1-S20.

Chumley, Lily H. and Nicholas Harkness (2013) “Introduction: Qualia,” Anthropological Theory 13(1/2), 3-11.

Clark, Katerina and Holquist, Michael (1984). Mikhail Bakhtin, The Belknap Press of Harvard University Press, Cambridge.

榎本剛士 (2022)「『クロノトポス』について：コミュニケーション分析に援用するための理論的基礎考察」『言語文化共同研究プロジェクト ことばと社会（１）』大阪大学大学院人文学研究科, 21-30.

Gal, Susan (2017) “Qualia as value and knowledge: Histories of European porcelain,” Signs and Society 5(S1), S128-S153.

Harkness, Nicholas (2014) Songs of Seoul: An Ethnography of Voice and Voicing in Christian South Korea, University of California Press, Berkeley and Los Angeles.

Harkness, Nicholas (2015) “The pragmatics of qualia in practice,” Annual Review of Anthropology 44, 573-589.

Harkness, Nicholas (2017) “The open throat: Deceptive sounds, facts of firstness, and the interactional emergence of voice,” Signs and Society 5(S1), S21-S52.

Harkness, Nicholas (2021) “Qualia,” The International Encyclopedia of Linguistic Anthropology, ed. by James Stanlaw, 1659-1664, Wiley-Blackwell, Hoboken.

Harkness, Nicholas (2022) “Qualia, semiotic categories, and sensuous truth: Rhematics, pragmatics, symbolics,” Estudos Semióticos 18(2), 56-82.

伊藤邦武 (1985)『パースのプラグマティズム：可謬主義的知識論の展開』勁草書房.

伊藤邦武 (2006)『パースの宇宙論』岩波書店.

Jakobson, Roman (1960) “Closing statement: Linguistics and poetics,” Style in Language, ed. by Thomas A. Sebeok, 350-377, MIT Press, Cambridge, MA.

Jakobson, Roman (1971 [1957]) “Shifters, verbal categories, and the Russian verb,” Selected Writings II, 130-147, Mouton, The Hague.

小山亘 (2008)『記号の系譜：社会記号論系言語人類学の射程』三元社.

茂木健一郎 (1997)『脳とクオリア：なぜ脳に心が生まれるのか』日経サイエンス社.

Morson, Gary M. and Emerson, Caryl (1990) Mikhail Bakhtin: Creation of a Prosaics, Stanford University Press, Stanford.

Munn, Nancy (1986) The Fame of Gawa: A Symbolic Study of Value Transformation in a Massim (Papua New Guinea) Society, Duke University Press, Durham.

Nakassis, Constatine V. (2016) “Linguistic anthropology in 2015: Not the study of language,” American Anthropologist 118(2), 330-345.

Parmentier, Richard (1994) Signs in Society: Studies in Semiotic Anthropology, Indiana University Press, Bloomington.

Silverstein, Michael (1976) “Shifters, linguistic categories, and cultural description,” Meaning in anthropology, ed. by Keith H. Basso and Henry A. Selby, 11-55, University of New Mexico Press, Albuquerque.

Silverstein, Michael (1985) “On the pragmatic “poetry” of prose: Parallelism, repetition, and cohesive structure in the time course of dyadic conversation,” Meaning, form, and use in context: Linguistic applications, ed. by Deborah Schiffrin, 181-199, Georgetown University Press, Washington, D.C.

Silverstein, Michael (1993) “Metapragmatic discourse and metapragmatic function,” Reflexive Language: Reported Speech and Metapragmatics, ed. by John A. Lucy, 33-58, Cambridge University Press, Cambridge.

Silverstein, Michael (2004) "'Cultural' concepts and the language-culture nexus," Current Anthropology 45(5), 621-652.

Silverstein, Michael (2007) "How knowledge begets communication begets knowledge: Textuality and contextuality in knowing and learning,"『異文化コミュニケーション論集』第 5 号, 31-60 頁.

Silverstein, Michael (2016) "Semiotics of vinification and the scaling of taste," Scale: Discourse and Dimensions of Social Life, ed. by E. Summerson Carr and Michael Lempert, 185-212, University of California Press, Oakland, CA.